

2025年12月15日（月）

老球の細道 899号

楽しいバスケットボールとは

会津バスケットボール協会 室井 富 仁

私たちが学生の頃に習っていた体育の授業とは主に「集団行動」や「ラジオ体操」をモデルにした「自校体操」などの集団体操、そして体力作りなどが主流で、その合間に球技系のスポーツなどであった。球技系のスポーツはゲームがほとんどで、得意な生徒には喜ばれたが、苦手な生徒には体育の時間が苦痛で、学校を卒業すると運動やスポーツなどから離れる人たちが多かった。体育やスポーツが楽しくなかったのである。

私は体育教員になって目指したのは体育やスポーツが好きになる「楽しい体育」の授業であった。そのテーマを求めて読み漁ったのが故高田典衛（筑波大学教授）氏の『体育授業入門』（大修館書店）であった。「子供の求める授業」という内容があり「授業はもともと児童生徒のためにある、彼らが喜ばないことには良い授業とはいえない、よい授業とは、児童生徒が良い授業と言ってくれるものに限る」と書かれてあった。今から50年前の本で、集団行動、鍛錬色の濃かった時代に、現在のトレンド「プレイヤーファースト」を主張していた。

高田典衛氏は良い授業、楽しい授業というのを四つの原則でコンパクトにまとめていた。私はこの「楽しさ4原則」をその後退職するまで追求し、同じ運動、スポーツを扱うバスケット部活動指導においても指導の原則とした。その4原則というのは下記の通りである。

1・快適な運動：精一杯運動をさせてくれる授業。運動量が不足したり、反対に多すぎたりせず、規律が乱れてだらけた遊びになったり、逆に厳しすぎて動きの自由がなかったりしない。事故の防止にも配慮されている。何よりも教材が面白い。

2・技能の伸長：技術や体力を伸ばしてくれる授業。伸びるということは誰でも嬉しいことである。子ども時代の体育の技能は、誰でもやればそれなりに伸びるものである。どんな小さなことでも、教師が認め、伸びたぞ、と言ってやれば、子どもはそれを喜ぶ。そのために教師は、練習法、記録の取り方、用具などで指導の工夫をしなければならない。

3・明るい交友：友人と仲良くさせてくれる授業。このような欲求は他の教科では見られない。運動によって展開されるさまざまな人間模様に目を開かせ、学習させる。そもそも良い体育の授業は、人間関係の適切な環境の中で成立する。

4・新しい発見：授業は児童生徒の好奇心や探求心を満足させるためにある。体育もしか（私はスポーツの歴史を授業で話すことで好奇心を刺激することを試みた）。

先日、JBAの指導者メールが送信されて来た。その中にパリ五輪で大活躍した河村勇輝選手のミニバスケットボール時代の話が掲載されていた。彼の話によると、ミニバスの時代はとにかくバスケットボールが楽しくてしかたがなかったと強調していた。指導者が選手に楽しさの指導を第一にすることで、河村選手の後の大ブレイクに結びついたのであろう。

昔も今も、体育もバスケットボールも前述した「楽しさ4原則」は不滅である。孔子も言っている「これを知る者はこれを好む者に如かず、これを好む者はこれを楽しむ者に如かず」。